質疑応答

ジャン・バーズレイ: ディスカッサントのお二人から素晴らしいコメントをいただき、ありがとうございました。 女性の多様性に目を向ける必要があるという、北村先生のご指摘はとても重要だと思います。明治時代においても、平塚らいてふなどの「新しい女」たちは良妻賢母主義に反発しましたが、中流階級の良妻賢母になることを強く望んだ女性たちもいたのです。どの時代であっても、人々の多様性というものは存在します。1959年のご成婚については、女性雑誌の中で『婦人公論』だけは、ご成婚にまつわるロマンスへの興奮に一石を投じ、婚礼についてのさまざまな異なる意見を紹介しています。ロマンスに限らず多様な要素があることや、皇室制度に反対する意見があることを説明しようとしたのだと思います。

ジュリア・ブロック: 女性たちの中の相違という点はとても重要です。そしてさらに、ひとりの女性のうちにも、 美智子妃のようになりたい気持ちと、ボーヴォワールのようになりたい気持ちが共存していることもあったと 思います。先行きの異なるいろいろな選択肢が与えられていたということで、そこからどれかひとつを選ぶ のはとても難しかったと思います。これは現代の若い女性たちについてもいえることです。しかし、占領期 の終盤当時、占領軍が進めようとした社会変化の成り行きはいろいろな意味で全国一様ではありません でした。そのため、女性たちに与えられた選択肢は、多様かつ相反するものでした。今日の基調講演で は、その複雑性が良く説明されていたと思います。

質問 1: サルトルとボーヴォワールの日本での一連の講演会について詳しいことはわかりますか?

ブロック:この企画の主催は、サルトルの書籍を出版した人文書院で、協力者は慶応大学の学者たちでした。そのひとりは、朝吹登水子の兄、朝吹三吉です。三吉の関わり方がどのようであったか具体的には知りませんが、登水子と三吉は共に、ボーヴォワールとサルトル、そして彼らと親しい知識人たちを良く知っていたと思われます。フランス文学、特にサルトルの研究で著名な白井浩司も中心人物のひとりです。加えて、特に東京地域の大学に協力を呼び掛けたようで、ボーヴォワールとサルトルは、複数の大学を訪問しています。また、『朝日新聞』や『婦人公論』などの活字メディアもふたりを招待しています。他にも多くのスポンサーたちが講演を依頼しており、たくさんの講演会が開催されました。

質問2:ボーヴォワールと美智子妃が会うことはあったのでしょうか?

ブロック: 私の知る限りはありません。ボーヴォワールとサルトルは、日本滞在中に大勢の知識人や政治活動家に会っています。例えば、ベ平連(ベトナムに平和を!市民連合)の代表です。ボーヴォワールもサルトルも左翼活動家でしたので、日本の同胞に会うことを楽しみにしていました。ボーヴォワールは女性労働者たちの話を聞きたいと思ったようで、実際に女性の港湾労働者や建築労働者と会っています。女性と労働という問題への関心はとても深かったのですね。あらゆる職業の女性と会って話したいと思っていたようですが、皇太子妃と会う機会はなかったようです。正直なところ、どうやったらそれができたかの見当すらつきませんが、もしも実現していたら、興味深い会話が交わされただろうと思います。

バーズレイ: 興味をそそられる質問ですね。 ボーヴォワールと美智子妃がどんな話をしたか? アメリカで日

本の女性作家について講義を担当していたとき、期末レポートとして、学生に、架空の会話を書くという課題を出していました。例えば、円地文子がボーヴォワールと話すとか、相手が紫式部だったらとか、蝶々夫人だったらという具合です。実際に話したり書いたりしたことを引用するという指示がありますので、すべてが空想という訳ではありませんが、学生たちはどんなことが起こり得るかを想像して書くことになります。このレポートを読むのはいつも楽しみでした。

質問 3: 最近は、哲学よりもコンピュータへの関心が高いようですが、どうしたら、実存主義哲学が人間の存在についての考察の手法として再評価されるようになるでしょうか?

ブロック: 実存主義哲学の最盛期は 1950~60 年代でした。皮肉なことに、ボーヴォワールが来日したころにはもう、ヨーロッパでの実存主義哲学の人気は下火になっていました。フランスでも、ポストモダニズムなど別の思想に、人々の関心は移行していました。実存主義全体となると話はだいぶ広くなるので、ここでは、ボーヴォワールの思想についてお話ししたいと思います。ボーヴォワールの思想は、様々な哲学の学派を総合して編み出されていて、実存主義もそのひとつです。現象学に依拠しているところも多くありますし、社会主義からの影響も少なからずみられます。というように、ボーヴォワールの思想は様々な学派の哲学の要素を含んでいます。しかし、ボーヴォワールが最近になって読み直されている理由は、ボーヴォワールが力を入れて論じた課題が現代にも共通するものだということに、女性たちが気が付いたからだと思います。例えば、仕事と家庭の両立や、社会的な育児支援や母親支援の欠如といった問題です。日本でも、アメリカでも、その他の先進諸国でも、こうした課題解決にあたっては悪戦苦闘しています。ボーヴォワールの思想の主要な要素は、1949 年に『第二の性』を執筆したころに形作られたのではないかと考えています、そして、そこで考察された広範な社会課題はいまなお続く課題なのです。

<u>質問 4:ボーヴォワールは日本のレズビアンにも影響を与えたと思いますか?</u>

ブロック: とても重要な質問ですね、ありがとうございます。ボーヴォワールが、女性との性的関係についての経験や、性的指向の多様性一般について語っていないと批判されているのは事実です。ボーヴォワール研究者であるウルスラ・ティッドは、この点について、ボーヴォワールは女性との性的関係を持ったことにより起訴されそうな状態であったと述べています。フランス警察は彼女について捜査していました。思うに、個人的な経験について書かなかったのは自己保身のためでしょう。当時のフランス社会には同性愛嫌悪の傾向があり、同性間で性的関係を持つことは違法でした。実際、ボーヴォワールが教え子である女子学生と関係を持っていたことを警察が捜査し始めたことは大きなスキャンダルで、それが原因で教職を離れることになりました。そうした状況を考慮すると、回想録の中で自身のセクシュアリティについて率直に書こうと思わなかったことは理解できます。とはいえ、これはとても残念なことですね。最も偉大なフェミニスト哲学者のひとりであるボーヴォワールは、セクシュアリティについて深く議論できるような経験をしていたにもかかわらず、それについて話すことができなかったのですから。

でも、今の発言については、少し訂正させてください。『第二の性』には、実は、レズビアンについての章があります。つまり、ボーヴォワールは、個人的な経験について話すことは避けていましたが、学術的かつ理論的には、これを論じています。ですから、ボーヴォワールのセクシュアリティについてや、彼女が異性愛規範を超越するセクシュアリティの問題にどう取り組んでいたかに興味がある方は、その章を読んでみてください。数ある他言語への翻訳の中には、この章を削除しているものもありますが、日本語版はそう

していないはずです。また、ボーヴォワールは、数多くの書簡を残しています。サルトルへの手紙は特に多くありますが、他の近しい人々あてのものもたくさんあります。保管されていた手紙は、ボーヴォワールの死後に出版されました。ボーヴォワールがバイセクシュアルであることが明らかにされたのはその時です。ボーヴォワールは私的な書簡に自分のセクシュアリティについて書いていました。遺産を相続した女性の手でそれらの手紙はとりまとめられ、翻訳もされています。関心をお持ちの方は、そちらも読んでみてください。

質問 5:翻訳の際に意味の複雑性が失われる可能性があるとのことですが、ある意味、多くの人に考え を伝えるためにはある程度の単純化も必要なのではないでしょうか。単純化と元の言葉の意味の複雑 性とのバランスをうまくとるには、どうしたらよいでしょうか?

北村文: 日本人女性の複雑性や多様性についての話は、実際、あまり受けが良くありません。私は、「日本の女性ってどんな感じ?」という質問に、「ん~、どの日本人女性について知りたいの?」と答えていますから、質問者が期待するわかりやすい返答にならないのです。単純化された、あまり複雑でない説明が求められがちであるというのは、その通りです。

ブロック: 最近、翻訳学に関心をもつようになっているのですが、その理由は、まさに今質問された点にあります。翻訳をしていてフラストレーションを感じたり、逆にワクワクしたりするポイントは、これは良い翻訳であるとか、これは悪い翻訳であるとかを、言うものではないことです。ただ単に、違う翻訳なのです。大切なのは、何を言わんとしているかが伝わる言葉を、丁寧に考えて選ぶことだと思います。曖昧な回答のように聞こえるかもしれませんが、本当にそうなのです。特に、ジェンダーにまつわる経験や、セクシュアリティ関連の経験といった、ジェンダーに関する文章を翻訳するときには、語られている問題そのものが既に複雑ですから、著者が言わんとしていることを正確に伝える言葉を見つけ出すのは至難の業です。こういう話をすると、翻訳者に対して厳しすぎると思われそうですが、言いたいことはそれではありません。わたしがここで指摘したいのは、翻訳で失われる何かがある危険性と、翻訳過程の重要性です。そしてそれを念頭に仕事をすれば、複雑な意味合いの文章をきちんと訳出することが可能だということです。

バーズレイ: 私は翻訳の作業が好きで、『青鞜』に掲載された記事をいくつも英訳しています。これはとても難しい仕事でした。訳出したものを日本人の友人たちに見てもらい、何度も、何人もの人と、見直しの作業を重ねました。そこまでしたのは、元の日本語の文章の意味をきちんと理解できているかを確認したかったからと、英語で読む読者にとってわかりやすいものにしたかったからです。仕上げの段階では、日本語と英語の突き合わせはもうやめて、英語の文章を声に出して読み、英語として自然な文章、流れの良い文章になるよう校正しました。私は、これが、日本語の作品に対する最も誠実な翻訳のやり方だと考えたのです。ブロック先生が指摘するとおり、一番難しいのは曖昧性や多義性です。単に曖昧なだけなのか、それとも何か見落としがあるのか、充分に検討します。曖昧なのだとなった場合は、同じ曖昧さを表現する言葉を懸命に探します。

そして、方言の翻訳も難問です。例えば、東京弁と関西弁の会話の翻訳ですね。そのふたつの違いを、 英語で書き分けるにはどうしたらよいでしょうか?谷崎潤一郎の『鍵』も翻訳者にとっての難問の一例です。 この小説では、夫の日記は漢字とカタカナで書かれ、妻の日記は漢字とひらがなで書かれています。この 場合はどうしたらよいでしょう?そうしたニュアンスのすべてを含めて翻訳するのは不可能かもしれません。 ゲイ・ローリー: 方言や、カタカナ・ひらがなのような問題に面したときは、正直、絶望的な思いになります。 ジャンが『青鞜』の翻訳で用いた方法、最後は日本語のテキストから離れて英語の文章の流れに耳を傾 けるというのは、素晴らしい方法だと思います。読み手が求めるのは、英語での響きなのですから。そして、 それが日本語の作品に対する最も誠実な翻訳のやり方だということも、その通りだと思います。

北村: 翻訳に良し悪しはないというブロック先生の言葉からの連想で、中立的な翻訳というものは可能だろうかと考えているところです。中立的なエスノグラファーになることは可能か、つまり、フィールドワーク調査で見聞きしたことを中立的に書くことの可能性は、私が繰り返し考え続けていることです。中立的でいることをあきらめたのではありません。私は、自分がだれで、どういう視点からこれについて書いているのかを、読者にわかるようにきちんと書いて示すことを心がけています。翻訳においても、翻訳者の「立ち位置」というのは重要な要素なのではないでしょうか? 翻訳者は機械ではありませんから。

ブロック: その点については、1997年の『決定版第二の性』の翻訳チームのやり方が良い例だと思います。自分たちの「立ち位置」についてオープンに書いています。第1巻、第2巻とも、「訳者あとがき」には、決定版翻訳を、なぜ、そしてどう作成したかの詳細を綴っています。読者の中には、翻訳チームの考え方に同意できたりできなかったりがあると思いますが、少なくとも、翻訳者が何をしてなぜそれが良いと思ったかを知ることができます。最初の翻訳に欠けていたのはこの点で、日本語訳には元の書籍と大きく異なる部分があることを皆が知るようになったのは、かなり後になってのことでした。ですから、決定版の翻訳者たちが、原著をどう読んだかを明記したというのは、読者のためになるのです。

質問 6: 『第二の性』の誤訳についての日本の研究者たちの議論はどのようなものだったのでしょうか?

ブロック:私が知っている限りのことをお話しします。1953年の生島遼一翻訳版は、長きにわたり日本の女 性たちにとって唯一無二の『第二の性』でしたので、そこに書かれていることが、ボーヴォワールが言わん としていることだと受け止められていたわけです。ですから、1953 年版に基づいて形成されていたボーヴ ォワールに対する先入観を改めてもらおうという、1997年版の翻訳者たちの取り組みは、険しい道のりで あったことと思います。翻訳チームが活動を開始したのは 1980 年代ですから、長い時間を要する作業で した。大著であるということもありますが、翻訳チームの研究者は、決定版の出版に先駆けて、これに関す る論文を執筆しています。最初の翻訳に問題があることを明らかにし、なぜ再翻訳が必要で、なぜそれを 決定版として出版したいと考えているかということを、複数の学術誌で発表しました。この発信が効果的で あったことは、その時期以降にボーヴォワールに対する論調を変えた研究者がいることからわかります。 例えば、佐藤浩子の論文には、翻訳チームのメンバーの論文からの引用が見られます。とはいえ、90 年 代半ばにもまだ、1953年版の翻訳に基づいてボーヴォワールを批判する論者はいました。例えば、1995 年、小説家であり女性文学批評家としても著名な三枝和子は、『第二の性』に対する批判を雑誌の連載 で発表していますが、その批判の内容は、1953 年版の誤訳に起因する誤解であるように見受けられます。 90 年代の半ばになっても、1953 年版の翻訳に問題があることを知ることなく、ボーヴォワールを批判する 女性の論者が少なからず存在したというのは、私にとって興味深いことです。 研究者の中には、1997年版 の翻訳に影響を受けた人や、すぐには反応を示さなかったか、そのメッセージをまったく受け取っていな い人がいたということです。『第二の性』を 1997 年の翻訳版だけで知っているのは若い世代の方だと思い ますので、世代間で受け止め方が大きく異なるということもあるでしょう。